

播磨の古代寺院と造寺・知識集団 22

伯耆・因幡の古代寺院を訪ねて

— 山陰道の古代寺院シリーズ —

寺 岡 洋

「播磨の古代寺院」という表題にもかかわらずこのところ播磨から離れています。7世紀後半から8世紀前半は列島あげて古代寺院の建築ブームであり、播磨だけでは播磨の際立つ特徴を見落してしまうということもある、と言い訳。

山陰道の古代寺院については、『むくげ通信』248・249号(2011年)に、“『出雲国風土記』の寺院を訪ねて”を2回書いており、今回は鳥取県域の、伯耆(ほうき)・因幡(いなば)です。この地域多くの古代寺院がみられる。

伯耆・因幡の古代寺院

鳥取県域は、かつての伯耆と因幡の二つの国からなる。万葉集掉尾の歌は因幡国守であった大伴家持が詠んだものとしてよく知られる。古代寺院跡と考えられる遺跡は22ヶ所とされる。国府所在地の久米郡(伯耆・倉吉市)と法美郡(因幡・鳥取市)に古代寺院が集中する。

伯耆国 6郡12ヶ所(14ヶ所という説も)

久米5、会見(あいみ)2、汗入(あせり)2、

河村2、ハ橋(やはし)1、日野0

因幡国 7郡10ヶ所

法美(ほうみ)5、高草(たかくさ)2、

八上(やかみ)、気多(けた)、巨濃(この) 各1

邑美(おうみ)0、智頭(ちづ)0

2012年3月16日(金) 曇

いつもお世話になりっぱなしのK氏と樟葉(淀川左岸)を出発。西伯耆の大寺(おおでら)廃寺、坂中廃寺、上淀廃寺は次回にし、中国道・落合Jct→米子道・湯原IC→国道313号線へ。

蒜山(ひるぜん)高原は一面の雪景色。犬挟(いねばさり)トンネルを抜けると鳥取県域。道の駅犬挟で昼食。関金(せきがね)の宿も雪景色だったが、北上するにつれ消える。「←藤井谷」の表示が見えたが、素通り。藤井谷には藤井寺廃寺(倉吉市史跡 倉吉市志津、東伯郡関金町藤井谷)が残る。大山(だいせん)の東麓、美作と伯耆をむすぶ交通路沿いに建立されたのであろう。

■斎尾(さいのお)廃寺(国特別史跡)

さらに北上し、県道151号線(倉吉東伯線)にぶつかると西へ。道路脇に斎尾廃寺の大きな看板あり。東伯郡琴浦町。大山北東の加勢蛇(かせいち)川東岸の台地上、広々としている。周辺ではハ橋郡家(ぐうけ)関連施設が調査されている。



寺域は、区画溝で東西160m×南北250mと広い。伽藍配置は南面する法隆寺式。山陰で唯一だが、金堂の北に講堂が配置される変則形。

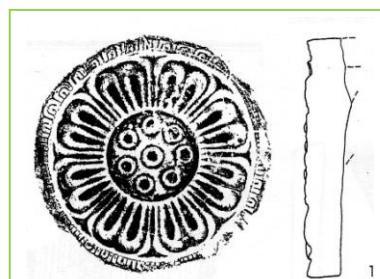
金堂跡、塔跡、講堂跡、中門跡、鐘楼跡などが復元、あるいは表示されている。

出土遺物には、塑像(螺髪(らほつ)・唇・鬚・仏頭)、埴仏、墨書土器に「東房」がある。

●蓮華文帯鷲尾(れんげもんたいしひ) (上図)

特筆されるのは蓮華文帯鷲尾が出土していること。蓮華文帯鷲尾は、名称のように蓮華文で装飾され、播磨・峰相山(みねあいさん)窯跡のトレードマークである。渡来系漢人(あやひと)集団と関連する。蓮華文に小異があり、斎尾廃寺の蓮華文は複弁八葉で、類例は斎尾廃寺のみ。

創建瓦には、小山廃寺式(紀寺式)と呼ばれる雷文縁(右図の外縁の文様が雷文)をもつ軒丸瓦が見られ、中国・四国で唯一の例になる。



雷文縁軒丸瓦は、山背では愛宕(おたぎ)郡・紀伊郡・宇治郡(おおよそ京都の東半)にのみ見られ、曰くありそうな瓦である。寺院は7世紀後半に創建され、平安時代まで維持されている。

山背国宇治郡に所在した大宅(おおやけ)廃寺(京都市山科区大宅)では、蓮華文帯鷲尾と雷文縁軒丸瓦が出土しており、注意される。

○琴浦町歴史民俗資料館(東伯郡琴浦町徳万)

JR浦安駅前(北側)の“まなびタウンとうく”5Fにある資料館では、蓮華文帯鷲尾をはじめ斎尾廃寺出土品が展示されている。

■法華寺畠遺跡(伯耆国分尼寺)(国史跡)

国分寺跡から北へ約50m、倉吉市国府(こう)。

板葺の四脚門（西門）・板塀が復元されており、どうみても官衙（かんが）という風情。

■伯耆国分寺（国史跡）

倉吉市国分寺、倉吉市の西郊。僧寺・尼寺ともに広い史跡公園。北には新羅を睨んだ四王寺（しおじ）山（172m）が位置する。

■大御堂（おおみどう）廃寺（国史跡）

伯耆国分寺跡から東へ、国府（こう）川、小鴨（おがも）川を渡ると倉吉市街に入る。寺跡は広いグランド、倉吉市駄経寺（だきょうじ）町。小鴨川と天神川の合流点付近の沖積平野に立地する。

一帯は久米郡勝部郷の比定地で、勝部という地名は勝部集団の居住によるものであろう。勝部（すぐりべ）は秦氏と同族か、関係深い氏族とされる。出雲国大原郡の郡司（大領と主帳）には勝部臣がいた。親縁関係があるのではと推測される。

近隣に勝宿禰（かちすくね）神社が残る。式外社であるが、貞觀十三年（871）、従五位下に叙せられており（『日本三代実録』）、古社である。

対岸には三明寺古墳（国史跡）や向山古墳群（500基以上の大群集墳）が存在する。

寺域は東西135m、南北165m以上、遺跡範囲は東西300m以上とされ広大。寺は7世紀後半に創建され、11世紀頃に廃絶。



伽藍配置は西に南北棟の金堂、東に塔を置く觀世音寺式。講堂、僧坊、回廊を備えた本格的な寺院である。出土した墨書き土器に、「久米寺」「久寺」があり、寺名が分かれる稀な例になる。塔心礎（上図）は上灘（うわなだ）小学校敷地内に移設。

大御堂廃寺の調査では伽藍跡の残りはよくなかったが、様々な新知見が得られている。

回廊・築地塀は、掘立柱から改築されている。上水施設が造られていた。僧坊の西に溜木（一辺約1m）があり、長さ96mの木樋が西に延びる。溜木には、「卯」「巴」など番付が表示されていた（倉吉市博物館に実物が展示される）。木材の推定伐採年（年輪年代）は730年頃。金属工房が作られていた。炉跡が7基検出されている。

木簡は、寺院内の文書行政が窺える内容である。墨書き土器は161点と多い。

軒丸瓦は15型式18種出土しており、4段階に分類されている。第1段階（7世紀第3四半期）は百濟系で、軒平瓦なし。第4段階（8世紀第3四半期）には新羅系のものが見られる。

鬼瓦、鷲尾、文字瓦、陶製瓦当范、埴仏、銅板押出仏破片、菩薩立像石仏の右脚部、塑像螺髮型など多くの遺物が出土しているなかで、新羅製と思われる銅製獸頭（右図）、銅製匙が注目される。横瓶を転用した尿瓶（しひん）もある。

伯耆国守・金上元

和銅元年（708）、武藏国で自然銅が発見され、年号が和銅に改元された。発見者とみられる金上元（名前から推定して新羅人であろう）が無位から一挙に従五位下に叙位され、翌和銅二年には伯耆守になっている。新羅製と推測される銅製獸頭・銅製匙などは、金上元が献納したものかと、想像している。



■大原（おおはら）廃寺塔跡（国史跡）

大原（おはら）の里へ。刀鍛冶で有名とのこと。天神川沿いに南に行けば三朝温泉が至近。支流の志羅谷川沿いに大原廃寺の表示あり。志羅谷（しらたに）とは気になる地名だ。小道を2~300m歩くと、ミカン畑に礎石が残る。志羅谷を見下ろす山の中腹に立地。

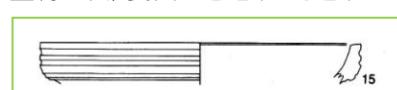


推定寺域は、南辺と西辺が約75m、北辺約69m、東辺約81m。伽藍配置は法起寺式だが、金堂と塔がくっついており、金堂の北側に講堂がある変則形。講堂は掘立柱建物で、瓦葺きでない。

心礎（上図）は、長径2.9m×短径2.8mと巨大。柱孔の直径65cm。寺の存続年代は、瓦などから7世紀末頃～12世紀頃とされる。

軒丸瓦は、8型式12種。Ⅷ類に新羅系（外縁に凸線による唐草文）。軒平瓦は、5型式6種。Ⅱ類に新羅系・均整忍冬唐草文がみられる。

出土遺物は、墨書き土器が3点（判読不明）、陶硯、転用硯、埴仏、塑像（螺髮）、泥塔、瓦塔、銅鏡片（右図）、銅製品、韁羽口など。



杯蓋（つきふた）は新羅の陶質土器の可能性があると指摘されている。銅鏡も新羅製ではないか、と想像される。

三朝温泉泊。日陰には雪が残っていた。

2012年3月17日（土）曇

倉吉博物館は縁豊かである。大御堂廃寺の獣頭・銅匙などを展示する。北上して天神川河口の湯梨浜町羽合歴史民俗博物館へ。次いで、海岸を東へ走り、因幡に。勝部（かちべ）川河口の青谷上寺地（あおやかみじち）遺跡展示館で弥生人骨など。

途中、野方（のかた）・弥陀ヶ平（みだがなる）廃寺（旧東郷町）、寺内廃寺（鹿野町）、吉岡大海廃寺（吉岡温泉町）、菖蒲廃寺（鳥取市）などがあるが、素通り。寺内廃寺は氣多郡家（けたぐうけ）（上原（かんばら）遺跡群）に近接する。

湖山池の南、道路工事により調査中の良田平田（よしだひらた）遺跡（鳥取市）では、木簡に「因幡国高草郡刑部郷」「孔王部」「刑部」などと共に、

「磨磨國播國」と書かれた習書木簡が出土しており、因幡と播磨とのつながりを窺える貴重な資料。

■土師百井（はじもい）廃寺（国史跡）

千代（せんだい）川の支流・私都（ささいち）川の北岸、山麓に立地する。川を挟んで、八上（やかみ）郡家推定地（万代寺遺跡）を見下ろせる。



JR因美線郡家（こうげ）駅から西へ、2km弱。調査が行われており、法起寺式伽藍配置（東に塔、西に金堂）をとる。塔跡は一辺約14m、塔心礎と16個のすべての礎石が揃っている。心礎の位置が礎石より低い位置にある（上図）。

出土遺物は、瓦の他に、塑像螺髪（らほつ）・鎮壇具・陶硯など。創建は出土瓦から7世紀後半とされ、9世紀頃までは存続したようだ。

■等ヶ坪（とうがつぼ）廃寺

廃寺跡は圃場整備された水田の下に。鳥取市国府町玉鉢。袋川に架かる玉鉢橋西詰に礎石が置かれる。



珠文帯複弁八葉蓮華文軒丸瓦（上図）

一周縁に珠文がめぐる統一新羅系文様—

播磨の奥村廃寺（たつの市神岡町）と同様の軒丸瓦が出土した。近接する岡益廃寺からも出土する。西播磨の美作道沿いに立地する奥村廃寺・越部（こしべ）廃寺・栗栖（くりす）廃寺・長尾廃寺の造寺集団と、親縁な関係であったのであろう。

岡益（おかます）廃寺（岡益の石堂）

岡益廃寺は岡益の石堂というほうが馴染みある。金堂跡・講堂跡・回廊の一部が確認され、あの特異な石堂は塔である可能性が高い。講堂は掘立柱建物であった。因幡万葉歴史館には、珠文帯複弁八葉蓮華文軒丸瓦や石堂の模型が展示される。

中郷大権寺（ちゅうごうおおごんじ）遺跡

寺院の遺構はないが、客土中に因幡最古の軒丸瓦（豊浦寺（とゆらじ）のものに似る）や鷦尾片などが出土し、因幡国府に近接して寺院が存在したことなどが想定される。丸瓦には「方」「序」「史」「長」などの文字をヘラ書きしたものがみられる。

鳥取市歴史博物館、鳥取民芸美術館に寄り、鳥取砂丘を見下ろす瀟洒でないホテルに泊まる。

■岩井廃寺（国史跡）

3月18日（日）曇

・小雨。鳥取砂丘に寄り、国道9号線を東へ、蒲生川中流の北岸に立地。山側に式内御湯神社、対岸に岩井温泉。



岩美郡岩美町。廃校になった小学校敷地に「鬼の鉢」と呼ばれる巨大な塔心礎が残る（上図）。

寺院の創建時期は7世紀後半、廃絶時期は遺物から9世紀以降と考えられている。

法美往来 岩井廃寺は山陰道が但馬から蒲生峠を越え、蒲生川沿いの平野に入った地点に立地する。峠から南に抜ける県道31号線（鳥取国府岩美線）は、近世に「法美往来」と呼ばれる街道であるが、古代にも道が存在していたであろう。南に抜けた地点に柄本廃寺が建てられている。残念ながら、積雪のため通行不能だった。

■柄本（とちもと）廃寺（国史跡） 双塔伽藍

鳥取市内に戻り、因幡国府・国分寺跡を通り、袋川沿いに山中へ入ると雪が深くなる。史跡整備事業が進められていた。



寺跡は雪に覆われていたが、金堂跡・講堂跡、それに金堂の東と南に二つの塔を持つことが確認されている。塔心礎は残る。柄本廃寺では瓦が一片も出土しない。